

NEW FACE

Sayuri Yosano
佐藤由里子さん(24)

シーケービー(東京都渋谷区)
機械営業部



華のあるへ花形

入社2年目、「色々経験したい」と意欲的何とも言えない爽やかさは、5歳から習っているラシックバレエから来ているのかもしれない。営業先との関係も良いとか。突然の出張も、全く苦にしない。「専門用語を理解し、メーカーと深い話がしたい。同社では二人目の営業レディ。億単位の商談も、周りのバックアップを得ながら担当してきた。商材はリヒティの裏面加工機など、花形選手。「デザイナーとメーカー双方から信頼され、バリバリやっている。先輩のよくな営業になりたい」。趣味は今も週二で通うバレエと、海外旅行。「次はブータンやペルーに行きたいです」。

記者になつて、4月で5年目に突入する。取材力はついているか、取材した内容をうまく記事にできているか、そんな記者としての実力について最近よく考える。記者という仕事に憧れて入社したが、決してキラキラした世界ではなく、原稿を書くのに苦しんでいる時間が圧倒的に多い。取材前には、取材先、製品についてしつかり予習をし、20個以上の質問を考え、取材が終わると、ここから書き始めて、最後はこうやって締めくくろう、と頭の中で考える。帰りの電車内は、それをメモするのに必死だ。ただ、いざ書き始めると、思ったようにまとまらない。未熟さを実感する。

上を目指している人たち

鬼頭精器製作所(愛知県豊田市)では、社員全員が国家技能検定1級取得を目指して頑張っている。現在、1級技能士は9人。八技能検定1級集団▽が会社PRになつてあり、社員の充実感にもつながっている。鬼頭明孝社長は、「自分の実力が国から認められ

て、自信を持つて仕事ができる」と話していた。技能検定が、社員の技術の証。職人気質の無口な技術者が多いが、名刺に書かれた八級技能士▽の文字が多くを語らなくとも彼らの実力を示す。

長島精工(京都府宇治市)でも、入社2年目の社員が技能検定に向け、日々技術と技能を磨いていた。2級の取得が、1人で機械を組み立てる最低条件。「早く取得したい」と目を輝かせていた。

しかし、そんな小手先のテクニックよりも、大切なのは取材で何を感じて、何を伝えたいか。ただ、それだけ。以前「原稿から何も伝わってこない。自分の殻を破つていらない」と編集長に言われた言葉が今も頭から離れない。正直悔しかった。記者に検定はないけれど、書いて経験を積めばいつか実力がつくと信じ、がむしゃらに書き続けたい。

(富田理沙)

記者になつて、4月で5年目に突入する。取材力はついているか、取材した内容をうまく記事にできているか、そんな記者としての実力について最近よく考える。

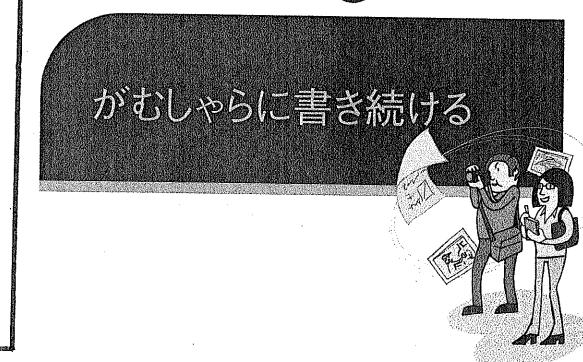
記者といふ仕事に憧れて入社し

たが、決してキラキラした世界ではなく、原稿を書くのに苦しんでいる時間が圧倒的に多い。取材前には、取材先、製品についてしつかり予習をし、20個以上の質問を考え、取材が終わると、ここから書き始めて、最後はこうやって締めくくろう、と頭の中で考える。帰りの電車内は、それをメモするのに必死だ。ただ、いざ書き始めると、思ったようにまとまらない。未熟さを実感する。

上を目指している人たち

取材現場から volume 22

がむしゃらに書き続ける



「何も伝わってこない」

検定は、自分の実力を測るのに最適。しかし、「1つ合格したら、別の職種も受験したくなる。さらに上の指導員も目指したくなつた」と鬼頭精器製作所の中林洋介さん。検定の資格取得は「一ルではなく、一つの通過点でしかない。上を目指している人たちに会うと自分も頑張ろうと思える。

昨年から新聞や雑誌の記事を書き写している。成果があるのかは分からぬが、語彙や言い回し、文章をどんな流れで書けば読みやすく、分かりやすい文章になるのか参考になる。

しかし、そんな小手先のテクニックよりも、大切なのは取材で何を感じて、何を伝えたいか。ただ、それだけ。以前「原稿から何も伝わってこない。自分の殻を破つていらない」と編集長に言われた言葉が今も頭から離れない。正直悔しかった。記者に検定はないけれど、書いて経験を積めばいつか実力がつくと信じ、がむしゃらに書き続けたい。

(富田理沙)